

きーるんせいじん
基隆聖人

いしざかそうさく
石坂莊作

ものがたり
物語



きーるんせいじん
基隆聖人・台湾図書館の父
ちち
たいわんとしょかん
台湾図書館の父
ひがしあがつま
東吾妻町の偉人
いじん
たいわん
台湾で尊敬された
そんけい
台湾で尊敬された
偉人

ふたりの「そうさく」

石坂莊作物語

明治三年原町で生まれた石坂莊作
台湾の人々のために尽くし、尊敬されたその生涯は

石坂莊作は明治三年、町役場で土地の管理の仕事をしてきた石坂太源次の長男として、東吾妻町・原町（旧原町）で生まれました。当時の原町は、学問に熱心な土地でした。明治五年、町村に小学校を設立する学制が制定されると、新井慎齋、山口六平などの尽力で、翌年小学校（後の原町小学校）が群馬県で三番目に早く開校しました。この地に生まれた莊作は、明治十年小学校へ入学し、勉学に励みます。



莊作の生家付近

しかし、莊作の家は貧しかったため、小学校を卒業後、

海外へのあこがれ

山村の小さな町で、学問に熱心だった若者が、台湾に行くきっかけは何だったのでしょうか。

明治二十七年、日本と清国（中国）の間で日清戦争が起きます。莊作も召集され、朝鮮から清国へとおもむきました。無事帰国した莊作は、吾妻高等小学校の教員となりました。

しかし、実際に海を渡った莊作は、広い世界へのあこがれの気持ちが芽生えたのでしようか。英語を学び、キリスト教に触れていたことも、外国への関心につながったのかもしれない。「もっと広い世界を自分の目で確かめたい」明治二十九年、二十七歳の莊作はフィリピン探検の目的



これが世界…！

で日本を旅立ちます。

フィリピンへ向かう途中で、兵役時代の友人に会った莊作は、誘われて台湾に立ち寄りました。

当時、日本は台湾を植民地にしたばかりで、日本人に統治されることをよく思っていない人たちが（抗日ゲリラなど）が各地にいて、その鎮圧に向かう部隊に入ります。現地鎮圧のため戦う一方、現地

その上の公立学校へ進学することはできませんでした。ただ、幸いなことに、この地には学問に情熱をささげる先生が多くいました。

新井慎齋は、晩年「天神山のおじいさん」と親しまれた人です。小学校よりさらに上の学校の必要性を感じ、有志と吾妻漢字書院を設立します。仕事を引退した後は、天神山に塾を開きます。そこでは、女性も学ぶことができました。莊作は、この人から漢学を学びます。

の人々を訪問し、言語や風習、文化を学んでいった莊作は「武力では何も解決しない」と考えるようになりま。莊作は、台湾の人々に親しみを感じるようになり、ここで暮らす気持ちを固めていきました。

台湾での成功

明治三十年、莊作は「台湾日報社」に入社し、副業として地図の販売なども行いました。その後、基隆（台湾北部にある都市）駐在の特派員に任命され、生涯を基隆で暮らすことになりました。

また、莊作は石坂商店という会社を興します。ますやばかりを売るお店で、基隆ではここでしか買えなかったため、大きな利益をあげることができました。さらに、莊作は、印刷製本



山口六平は、東橋を架けるにも尽力した人です。キリスト教徒になった六平は、自宅に白石村治という若い伝道師を住ませ布教させていました。莊作は、この伝道師から英語を学びました。その後、茨城県水戸の加治塾で学び、帰ってきた莊作は、原町小学校の教員となります。子どもに教えながら、大柏木の富澤我琴に漢学を学びます。この人は、後に吾妻郡内の町村誌を八十冊も編述した学者です。

現在の基隆の風景



業や酒造業、たばこ販売業などの事業も行いました。誠実に熱心な人柄の莊作は、基隆の人々の人望を集め、事業を成功に導いたのです。

明治三十三年、莊作は、岐阜県の尾崎豊四朗の娘つね子と結婚します。東京で結婚式を挙げ、ふたりは台湾で仲睦まじく暮らしますが、残念ながら子どもには恵まれませんでした。

教育への熱い思い

明治三十六年、莊作は私立の「基隆夜学校」を設立しました。この学校は、恵まれない勤労青年のために、授業料は無料で、日本人だけでなく台湾人も平等に受け入れられました。ここからたくさん優秀な人材を世に送り出したのです。また、女性教育も重要と考え、「基隆技芸女学校」を設立しました。



石坂文庫と石坂公園

莊作が残したのは、学校だけではありませんでした。日本人や台湾人に平等に開放し、無料で利用できる「石坂文庫」と呼ばれる図書館を作りました。台湾で最初の図書館です。当時の図書館は、日本でも利用料がかかるものであったので、現在の図書館制度にも通じる画期的なものです。貧しくとも学問をしたい向上心のある若者を応援する莊作の思いの現れでした。また、「石坂公園」という公園も造りました。この公園は、市民の憩いの場であり、非常時の避難の場にもなりました。「中正公園」と名前が変わりましたが、現在でも基隆市民に親しまれています。台湾でお金を儲けた日本人は金庫を持っていましたが、莊作は持っていませんでした。

石坂莊作とも交流のあった新井信示が編纂した『原町誌』には、莊作の功績とともに、故郷への贈り物が多く記されています。母校であり、教師として勤めた原町小学校には、莊作から送られた品々がありました。しかし、校舎の火災により焼失してしまったのは、とても残念なことでした。莊作の死後、七十年近く過ぎ、故郷原町でも石坂莊作の名前を知る人は少なくなっていました。

台湾との懸け橋

第二次世界大戦の空襲で、「基隆夜学校」や「基隆技芸女学校」、「石坂文庫」も燃えてなくなりました。戦後の台湾は、日本の支配を離れ、日本人のよい行いを言いづらい時代が続きました。石坂莊作の存在も、次第

た。なぜなら、台湾人から手にしたお金は、すべて台湾人のために使っていたからです。台湾で得たものは台湾に返すべきだという莊作の精神に基づいているのです。

当時、日本は台湾を植民地としていました。欧米などの国々も、海を渡りアジアやフリカの国々を植民地にしていた時代でした。しかし、台湾の人々のために尽力した日本人もたくさんいました。石坂莊作もそのひとりです。台湾で尊敬される存在でした。町の人や学校の生徒からも敬愛された莊作は、いつしか「基隆聖人」「台湾図書館の父」と呼ばれるようになります。

昭和十五年、莊作は基隆の病院でぜんそくにより亡くなります。基隆の人のために尽くした七十一年の生涯でした。

る動きになりました。遺族や有志を中心に顕彰会が発足し、専門家を呼び研究する中で、善導寺にある墓石の他に、実際に埋葬された墓の存在が明らかになるなど新たな発見もありました。

藍さんは、莊作の墓前でこう言いました。「学校がなければ、今の自分はいなかった。この学校のおかげで社会に競い合い、生きていくことができた」

また、平成二十九年、台北駐日経済文化代表處の謝長廷代表（当時）が東吾妻町を訪れました。基隆夜学校の初代校長の石坂莊作は、今でも台湾で尊敬されている存在だと教えてくれたのです。この訪問をきっかけに、東吾妻町でも石坂莊作を顕彰す

石坂莊作と東吾妻町

台湾のために人生を捧げた莊作でしたが、故郷を忘れてはいませんでした。晩年、故郷の友と交わした手紙には、吾妻名産の胡桃入りの岩櫃餅が大変美味だったと、老後の楽しみとして胡桃を育ててみたいから送ってほしいとあります。離れていても故郷を懐かしみ、町や地元の小学校にも多くの寄付をしているのです。



故郷の友に宛てた直筆の手紙

また、顕彰会と地元菓子屋の協力により、石坂莊作縁のくるみを使った「岩櫃餅」が復活しました。莊作の作った学校や図書館の建物は焼けてなくなりましたが、しかし、莊作の想いは、学校の方針に、本を読む喜びに、公園の鳥のさえずりの中に、残っているのかもしれない。誰もが教育を受ける権利を持たなければならぬという熱い思いと、台湾の人々のために尽くそうとする温かい想いが、時を超えて台湾・基隆と東吾妻町との懸け橋となったのです。



善導寺にある莊作の墓と案内板

基隆の中学校と、東吾妻中学校との交流も始まり、令和元年中学生が基隆を訪問しました（コロナ禍の中止を経て、令和六年に再開）。

